校長だより

★修学旅行日記

　6月4日（日）・5日（月）・6日（火）と3日間、修学旅行ということで3年生と一緒に長崎方面に行ってきました。そのご報告をさせていただきたいと思います。修学旅行をテーマ別に紹介します。

「**学ぶ**」・・・「学ぶ」の筆頭は平和学習ではないでしょうか!?なかでも大変貴重だったのは田中重光さんという被爆者の方からのお話が聞けたことでした。終戦から78年が経ちました。戦後それだけの年数がたったということは、戦争をじかに体験した方の数は年々少なくなってきているということでもあります。当然広島や長崎で被爆された方もかなり少なくなっていて、被爆された体験をじかに聞かせていただくこともかなり難しくなっています。それだけに個人の旅行ではほぼ経験できないこの体験ができたとことは本当に素晴らしかったと思います。私が感動したのは、最後のお礼のあいさつのシーンでした。末吉君が代表で話してくれたのですが、原稿を読むではなく、とつとつと自分の言葉で思いを語る姿に胸が熱くなりました。そして最後に末吉君が頭を下げたときに、号令があったわけでもないのに、学年の生徒が頭を下げてくれている光景に、目頭が熱くなりました。そのあと、平和祈念式を行い、折り鶴をささげ、原爆の慰霊碑の説明を聞き、そして、資料館の見学と熱心に学ぶことが出来ました。ここはただの公園ではなく被爆して亡くなった方がたくさん眠るお墓の上を歩かせていただいているということ、水の施設がたくさんあるのは、被爆された方の多くが「水をください」と言いながら亡くなった事実からだということを知り、資料館の見学では、「加賀田中学校の生徒は熱心にメモを取りながら見学しているので、他の学校の倍の時間をかけて学んでおられました」というツーリストの方からのお褒めの言葉もありました。その他にも、グラバー園、26聖人、浦上天主堂、永井博士、大浦天主堂、出島、福岡博多論争、太宰府天満宮などたくさんの地理歴史のことを現地で学べました。

「**つながる**」・・・この修学旅行では、事前からたくさんの取り組みが行われていました。特に修学旅行実行委員の活躍ぶりは特筆すべきものがありました。自分たちの修学旅行を自分たちの手で作っていく。そんな姿勢が修学旅行の成功につながりました。この経験は、この先社会人になったときに花開くことでしょう。また、修学旅行の中ではメンバーを変えての多くの班活動がありました。長崎市内班行動、ハウステンボス班行動、太宰府天満宮班行動、食事、部屋、風呂、新幹線、バス等、仲間とのつながりをもてたのではないでしょうか。そこには先生方の用意してくださったデジタルカメラも一役買ってくれたことでしょう。

「**楽しむ**」・・・長崎市内班行動、ハウステンボス班行動、太宰府天満宮班行動もありましたが、私がすごいと思ったのは二つ、バスレクと夜レク。本物のテレビ番組かと思うほどのバスレクビデオのクオリティーには驚かされました。私は是非加賀田中アカデミー賞をあげたいと思いました。そして、特筆すべき夜レクの盛り上がり。別の用事があったので一部しか見ることはできませんでしたが、外にまで聞こえてくる歓声が楽しい雰囲気を教えてくれていました。その他、家族や友だちや自分のための買い物を楽しむ様子や食べ歩きの姿などとても楽しそうでした。

★アラブの風に吹かれて

今日はアラブで働く人々の話をします。実はアラブ首長国連邦の全人口のうち90％は外国人です。10％の自国民と、あとはわれわれ日本人も含め各国から出稼ぎのようにやってきた人たちです。各国の人たちは例えば警察官はオマーン人が多く、タクシードライバーはパキスタン人が多いという具合に、出身国ごとに職業のおおよそのすみ分けのようなものがありました。

私が住んでいるフラット（日本でいうマンションちなみにマンションは和製英語で英語としては通用しません）のウォッチマン（ビルの管理者）が、私に車を洗わせてほしいと言ってきました。いくらか聞いてみると、日本円で1500円ぐらいといいます。まあ手洗いだから1回1500円ならいいかと思っていると、1か月毎日洗って1500円ということでした。われわれの金銭感覚とは大きく違う状況にびっくりしました。

スーク（市場）に行くと体重計を置いて座っている人がいます。体重測り屋さんというお仕事です。その他にも水タバコ屋さんとか様々な香辛料を売る人とか変わった店が多く楽しいです。

車に乗って学校に行っていると、赤信号で止まると子どもが新聞をもって車のそばに駆け寄ってきます。小学校高学年ぐらいの子どもで家計の足しに新聞を売って働いているのです。魚スーク（市場）に行くと段ボールを頭の上に載せた子どもが横に来ます。「私が買った魚を箱の中に入れろ」と言います。車まで運んでチップをもらう少年です。映画館では、映画が終わると日本では考えられないほどのゴミが床に落ちています。そのごみをこれまた小学生ぐらいの子どもが片付けていきます。みな家族のために仕事をして稼いでいるのです。生きていくために小さいうちから働く子どもたち。勉強はどうなるのかと心配になる反面、生きる力のたくましさも感じました。ゲーム漬けの日本の子どもより生きる力があるのかもと思います。

建設現場などでは、40度を超える気温の中たくさんの人が働いています。日本人が100m歩くのにもタクシーを使う気候の中、何時間も働いています。家には我々が1家族で住む家に労働者ばかりが集まって大人数で住み、おかずは10人ほどにツナの缶詰一つの日もあるようです。楽しみは年１回帰国して家族に会うことだそうです。

ある時私はそんな労働者の一人に失礼な質問をしました。「あなたは幸せか？」と。そうすると、その人は心配そうに私を見て、「もちろん幸せだ。逆にあなたは何か悩んでいるのか？私が助けてあげるから何でも相談してくれよ」と言ってくれました。私は「幸せってなんだろうな」と反省すると同時に、上から目線で失礼な質問をした自分を恥じました。